

地域活動における教育観と地域社会の維持機能の検討 —地域の祭りをめぐる「子ども」語りに注目して—

伊藤 雅一

千葉大学大学院人文社会科学部 博士後期課程

地域社会と教育の関連について論じられる際、両者の結びつきは必要視される。その一方で、地域社会が教育を展開する場として適しているのかは十分に検討されてきたとは限らない。千葉県千葉市における地域の祭り「夜灯（よとぼし）」を事例に、夜灯に参加する子どもと、語りに表れる「子ども」に注目していく。その際、象徴人類学者のターナーが提唱した「コムニタス」概念に基づく図式を分析視角として考察を試みた。その結果、学校の存在を基盤とした子どもの参加と、祭りの中心スタッフの想定する「子ども」の参加との差異が見出された。そして、地域の祭りにおける「子ども」に対する教育的意図の関係を図式化した。その図式は、視野を広げれば「地域の再生産システム」の想定としての解釈も出来る。ただ、地域社会における「教育の機会」は容易に見出せないことを浮き彫りにし、今後の研究課題を示唆した。

キーワード：地域社会と教育、祭り、コムニタス、教育的意図、再生産

1. はじめに

「地域社会と教育」というテーマにおいて、「子ども」は地域社会での「社会化」(住田 2001) や、地域社会で大人と「共同し参画」(佐藤 2002) する主体として論じられてきた。また、「地域と学校」というテーマでは、地域で大人社会を垣間見る子どもの地域活動を前提にした「学校と地域」の連携に価値を置く研究(玉井 1996) や、地域社会の課題を教材化する教科教育的な発想の研究(唐木 2008) などが挙げられる。

地域社会と教育の接続が必要だと論じられる一方、地域社会の側は教育の受け皿として機能するのだろうか。そもそも「子ども」は地域社会においてどのように構成されているのだろうか。高田一宏も「地域や家庭をめぐる行政施策や住民の取り組みは盛んになってきたが、それらがどのように地域じたいの教育力の内実を創り出し、あるいは活性化しているかについては、十分に解明されていない」(高田 2008:p.34) としている。

本稿¹では、「子どものため」と語られる側面をもつ地域の祭りを例に挙げ、象徴的に語られる「子ども」の機能について検討する。地域の祭りにおいて子どもの参加する機会や、地域の祭りを運営する人々の語りに表出する「子ども」に焦点を当てる。ここでの「子ども」観から見出せる、教育空間として自明視されていない場(地

域)において観察される教育観の考察を目指す。

2. 分析視角

地域社会学者の田中重好は、過去の都市祭礼・祝祭研究をふまえた上で、都市祭礼への分析視角／都市祭礼からの分析視角として、「資源動員論」「集合行動論」「シンボル分析論」の3つを挙げている(田中 2007:pp.81-84)。本稿では、地域の祭りにおける「子ども」の象徴的な機能に着目していくため、祭りを文化論や意味論において捉える「シンボル分析論」が適している。具体的には、象徴人類学者のヴィクター・ターナーが提唱した「コムニタス」概念の図式に従って考察を試みる(Turner 1969=1976)。この図式の説明は考察の際に改めて行う。「コムニタス」概念を用いる妥当性としては、第一に祭りが「コムニタス」(未組織で未分化な時期のコミュニティ)として論じられてきたこと²、第二に「子ども」に注目する上で「通過儀礼」の過程をベースとする「コムニタス」の図式は「子ども」の経験を位置づけることが出来ることの2点を挙げられる。

3. 調査方法と地域概要

3.1. 調査方法

新興の地域の祭りである「夜灯（よとぼし）」のスタッフとしての参与観察(フィールドノーツ)、夜灯の運営を継続的に担っているスタッフへのインタビューを主なデータとして扱っていく。筆者は2009年から月に

Masakazu ITO : Study of Educational Sight at the Community and Maintenance Function of Community : Focus on Narrative of "Children" around the Community Festival
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

1~2 回開かれる祭りのスタッフ会議などに参加を開始し、現在も継続的に関わっている。これまでのインタビューは祭の運営の中心的役割を担う稲毛商店街振興組合に所属する 5 人と、地域外部から「通い」で関わっているスタッフ 1 人および大学生 4 人を主な対象としてきた³⁾。

3.2. 地域概要

稲毛地域は、JR 総武快速線を使用すれば東京駅ー稲毛駅間を約 35 分で結ぶ郊外にあたる。行政区分としては千葉市稲毛区にあたるが、下記の地域に焦点を当てて調査していることや、対象地域の住民における認識の範囲を考慮して「稲毛地域」⁴⁾と表していく。学区との関係で言えば、1つの中学校区とほぼ重なる地域である。



図1 東京と稲毛地域の距離関係
(Google Map API V3 版より筆者作成)



図2 稲毛地域の地図 (yahoo! 地図より筆者加工)

表1 千葉市・稲毛区・稲毛地域の人口・世帯
(2010年国勢調査をもとに筆者作成)

		千葉市	稲毛区	稲毛地域
人口	総数	961,749	157,768	20,264
	男	480,194	78,835	10,129
	女	481,555	78,933	10,135

以前は海に面した半農半漁の村であり、海を中心とした保養地・観光地であったが、1961年の埋め立て事業開始以降はベッドタウン開発された。この開発によって、京成稲毛駅と海辺を行きかう人々（観光客と漁師たち）でにぎわっていた稲毛せんげん通り商店街は衰退していく。しかし、稲毛せんげん通り商店街の理事たちの世代交代していく時期から活動に変化があり、2002年から様々な商店街活動を展開していく。本稿で取り上げる地域の祭りもその活動に端を発している。



図3 稲毛せんげん通り商店街の位置
(yahoo! 地図より筆者加工)

3.3. 新興の祭り：稲毛あかり祭「夜灯」(よとぼし)

2006年から始まった新しい祭り「夜灯(よとぼし)」は、正式名称を稲毛あかり祭「夜灯」といい、夜中にカンテラをかざしつつ行った「夜灯漁(よとぼしりょう)」(主に新月の晩、遠浅の浜辺にできる潮溜まりの小魚やエビをカンテラ片手に獲る漁、生業よりは遊びに近い漁)の光景にちなんで、手作りの灯籠を稲毛地域の道や公園に並べる祭りである。夜灯漁は、古くから稲毛地域に住む人にとって海水浴や潮干狩りでにぎわった頃の稲毛地域を象徴する記憶である。ところが、昭和36(1961)年から稲毛海岸の埋め立て事業が始まったことで、海にまつわる記憶は海と共に埋まってしまった。こうした稲毛地域の歴史的経緯を受けて、夜灯は古くから稲毛地域に住む人にとっての記憶を懐かしむ場となりつつある。また、海があった頃を知らない稲毛地域の住民にとって、夜灯という地域の祭りの記憶を新たに生み出す場となっている。

夜灯は、最初の3年間を隣町の総合大学に属する学生団体とせんげん通り商店街とによる産学連携事業としてスタートした。だが、事業の補助金年限であった3

年を過ぎて学生団体が抜けた後、資金的にも人材的にも夜灯運営に危機が訪れる。

そこで、地域団体を集めて夜灯の運営をどうするのかを改めて話し合われた。その結果、「街の歴史に光を当て、暮らす人々のつながりを大切に、この街を夢あふれるまちへ」という理念を掲げて、「スタッフ会議として話し合っただけでは、それぞれの団体の利益だのエゴだの、そういうのを一切排除して、この夜灯というお祭りが運営していくのに正しいあり方として運営しよう」と決まった。

4年目以降は、自治会など地域団体と連携をしながら、稲毛せんげん通り商店街の店主たちが中心となって運営する体制となり、「本当の地域連携」が始まったと語られている。

3.4. 夜灯実行委員会の構成

現在の夜灯運営の中心は、稲毛商店街振興組合の5人であるが、他にも以下のような所属の人々が関わっている。夜灯の運営をしている夜灯実行委員会の役付きスタッフは、夜灯の運営に関係ある各団体（自治会やガールスカウトなど）の代表者が所属している。稲毛商店街振興組合の5人の兼務と夜灯参加に意欲的な周辺自治会の関係者が占めている。人数は約20人である。

役職のないスタッフについては、定期的にスタッフ会議に参加している人がスタッフとして認識されている。興味があって手伝っているボランティアや、夜灯の場で何かを企画して行いたい人たちが行き交う。従って、厳密にスタッフ登録するような場ではない。人数も上の組織表のスタッフ以外は変動幅がある。大まかに述べれば10～20人といったところだろう。

表2 夜灯の年間行事 (2012年の活動を元に筆者作成)

2月～4月	第1回スタッフ会議 (前年の祭りの会計報告・反省会・実行委員会の役員選出)
5月～6月	モーニング・フェス (夜灯運営資金のための朝市)
7月14・15日	浅間神社の大祭
8月	夜灯の冊子校正・舞台出演者募集・露店出店者募集
9月	竹切り(次の週末に竹加工)、秋の大収穫祭、ワークショップ(～10月初旬)
10月	灯籠の整形作業(～11月)、野外電球の飾りつけ
11月16日	プレ夜灯(お寺での講話など)
11月23・24日	前夜祭・本祭
11月25日	後片付け

4. 夜灯における子どもの参加する機会

4.1. 灯籠を描いて見てまわる子ども

夜灯における子どもは、夜灯の主役である灯籠の絵柄の描き手⁵⁾として位置づけられている。この灯籠は、竹を加工して作られる竹灯籠と区別して「手づくり灯籠」と呼ばれることがある。他にも稲毛中学校の美術部によって制作される大型の灯籠などもある。



図4 夜灯の様子

(小学生の描いた灯籠が公園の一面に並べられている)



図5 手づくり灯籠(小学生の絵)

灯籠は、稲毛地域の3つの小学校(1つの中学校区)と1つの幼稚園で授業の時間を1クラス1コマもらって、「ワークショップ」(夜灯漁に関する紙芝居披露+灯籠の絵を描いてもらう作業)を行い、子どもたちに絵を描いてもらう。他にも地域イベント時に絵を描くブースが設置される。第1回夜灯は約1000個の灯籠であったが、第8回夜灯(2013年)では手づくり灯籠だけで6000個ほどになっている。夜灯は、稲毛せんげん通り商店街の店主たちが中心となって運営している一方、祭りの観客はベッタタウンとして住まう人々、特にその多くは灯籠を描いた子のいる家族が中心となっている。

「ワークショップ」によって、3つの小学校の全校児童が夜灯漁について聞き、灯籠の絵柄を描いている。夜灯は2013年で8回目なので、小学校を卒業するまでに「ワークショップ」を6回経験した学年が3つあることになる。「ワークショップ」については当初難色があった⁶ようであるが、今では「学校どうして（参加を）競い合っている」雰囲気があり、新任の教頭が「（夜灯がある）この学校にやっけてきて誇りに思います」と挨拶するくらいになったと夜灯実行委員長の渡部は語っていた。

表3 1コマ（45分）分の「ワークショップ」の流れ
（筆者のスタッフとして参加した経験より作成）

時間	取り組みの内容	
5分	スタッフの自己紹介	保護者、近隣の大学生が主なスタッフとなっている
10分	紙芝居	海に面していた稲毛地域、夜灯漁について、夜灯についての内容 紙芝居は小学生が描いた絵を紙芝居に加工してできている
25分	絵を描く	あらかじめ大まかなテーマが夜灯スタッフによって決められている 第8回は「たいせつなもの」
5分	夜灯の宣伝	子どもの絵が灯籠になって夜灯にて飾られることを伝える 夜灯の写真と開催日時が記されているハガキをプレゼント

表4 小学校の「ワークショップ」参加人数
（2014.8.27のスタッフ会議による発表より）

稲丘小学校	稲毛小学校	小中台南小学校
667人	514人	295人

4.2. 学校の存在を基盤とした子ども参加の仕組み

ここで、夜灯での子どもの参加する機会について簡単にまとめておくと、第一に、夜灯の主役である灯籠の絵柄の書き手としての参加の機会がある。この機会は、学校の授業時間を活用しているため、稲毛地域に住む子どもの大半が参加することとなる。第二に、灯籠が飾られる夜灯当日に観客として参加する機会がある。夜灯当日は、子どもの描いた灯籠を探す家族が数多く訪れている。

夜灯に子どもが参加する機会を提供する観点から言えば、「ワークショップ」が学校の授業の一環として定着してきたことにより、稲毛地域に住む子どもの大半が確実に夜灯へ参加する機会を経験するという仕組みが

できあがってきたと考えられる。また、夜灯当日に関しては、日が沈んでから灯籠の並ぶ光景を見る祭りなので、子どもが保護者同伴で参加することは一般的だと見受けられる。地域の祭りに観客として参加することが家族行事になりつつあることは、夜灯に子どもが参加する機会を安定化させるだろう。

こうした、夜灯に子どもが参加する機会は、学校の存在を基盤とした仕組みとなっており、学校側も夜灯と子どもが関わることは好意的に受け取られていることがうかがえる。筆者がワークショップにスタッフとして参加した際も、各校の教頭や校長が「子どもが地域文化に触れる大切さ」「子どもの作品が地域の祭りに飾られる素晴らしさ」などについて挨拶で述べることを何度も耳にしてきた。

5. 夜灯において語られる「子ども」

5.1. 夜灯と「子ども」

4. では、子どもたちが夜灯とどのように実際に関わっているのかを見てきた。そこでは、学校の存在が重要であり、学校を通して見た子どもの参加を把握することができた。それでは、灯籠の最初の工程を担う子どもを夜灯の運営側はどのように見ているのであろうか。次に、夜灯を中心的に運営しているスタッフが語る「子ども」について、代表的な語りを参照しつつ見ていく。

(1) 守る対象としての「子ども」

夜灯の実行委員長である渡部は、夜灯を「子どもの祭り」「子どものための祭り」と普段から語っており、スタッフ会議の際にもその旨を呼びかけている。どのような意味で「子どもの祭り」なのだろうか。それは、以下に挙げる渡部の語りに表れている。

（夜灯の役割について話している）

渡部：ま、商店街の活性化にもつながるし。子どもたちの顔も覚えられるじゃない。子どもが顔覚えてくれるでしょ。地域にこういう大人が居るよっていうのが分かれば地域で今度子どもを守っていけるで。（2012.6.18 インタビュー）

渡部は、夜灯の役割について地域の子どもの「顔見知り」になることを挙げている。更に、子どもと面識を持つことで「地域で子供を守っていける」と考えている。ここから、渡部の想定する地域の子どものは、地域で守るべき対象として語られていることが分かる。渡部にとって「子どもの祭り」とは、地域の大人と地域の子どもの出会い、つながりをつくる場として想定されている。

(2)地域の誇りを語れるようになる「子ども」

現在、夜灯の事務局を務める川口は、第6回夜灯まで夜灯実行委員長を務めていた。夜灯運営における「シンクタンク」のような存在である。川口の語る「子どもの祭り」は渡部と違った観点から語られている。

(他の祭と比較して夜灯について話す中で)

川口：地域の人たち、地元の人たちが参加して、私子どもの時にあれやったんだよ、絵を毎回書いたんだよ、それを飾ってくれてね、それがね街中にずっと並ぶのよっていうようなことを、例えば大学生になってね、仲間にウチの街ではこんなお祭りやってるんだっていうことを、誇らしげに言えるような、そんな街になった方がいいじゃん。それがなかったから、何とかそれをしたかったっていうのもある。(2012.8.29 インタビュー)

川口は、灯籠づくりを経験した子どもが将来、誇らしげに生まれ育った地域について語れるようになることを想定しており、現実になることを望んでいる。子どもが地域から離れたところで「ウチの街」の「誇らし」いことを語ることは、子どもを地域での経験を忘れずにいる存在として捉えているようにも受け取れる。川口にとっての「子どもの祭り」は、子どもが「地域の誇り」として語れる経験をする場であると想定されている。

(3)夜灯運営の担い手としての「子ども」

(1)は「子ども」の現在起こる変容、(2)は「子ども」の将来的な変容が語られていた。夜灯運営の中心スタッフの語る「子ども」は、現在から将来まで長期的な移行を前提にしているようである。次に挙げる渡部の語りは、「子ども」の長期的な移行を段階的に想定していることが分かる。

(夜灯に関わる子どもについて話す中で)

渡部：中学生の時に手伝って、高校で個人的に手伝いに来て、大学で大手を振って出てくる。あと3年…あと6年か。それを期待するしかないな。子どもの頃にお祭りを体験することが大切。
(2012.6.18 インタビュー)

渡部は、夜灯運営における役割の変容と「子ども」の変容を重ねて語っている。地域の子どもの夜灯を経験していくのと併せて、学校段階を移行していくと渡部は明確に想定している。その移行は、夜灯運営における役割の移行と重ねて想定されている。

ただし、今のところ夜灯を経験した子どもが夜灯運営

に個人的な参加をしている例はない。その一方で、夜灯運営の中心スタッフたちは年を重ねてくる中で、夜灯運営の後継者がいない問題を意識している。「子ども」の長期的な移行を見守りつつ、関わりつつ、ゆくゆくは夜灯運営を担ってほしいという思いが、以下の語りからうかがえる。

渡部：それまで自分の(灯籠)を探しまわってたのを点けてまわる。そういう流れ、つながり。年代の流れちゅうかさ、俺らだっただんだけ引退していかなきやいけないし。杖についてはできないし。

(2012.6.18 インタビュー)

5.2. 商店街や地域と「子ども」の関係にまつわる語り

これまで5.1.では、夜灯という地域活動の運営における「子ども」を中心に上げてきた。ここでは少し視野を広げて、商店街や地域と「子ども」の関わりについて述べておきたい。

(4)商店街と「子ども」

(1)において、夜灯の役割は「商店街の活性化にもつながる」と渡部は語っている。商店街と夜灯、商店街と「子ども」はどのように関わっているのだろうか。夜灯実行委員会で会計を務める古屋は次のように語る。

(夜灯の役割について話す中で)

古屋：夜灯みたいな地域の人と密着、ふれあいをもつっていうのも大事。顔見知りになればやっぱり来てくれるっていうのあるじゃん。若い子からね、小さい子まで顔見知りになれば、先々でもお客になる可能性がある。遠回りを考えれば。

(2012.8.22 インタビュー)

古屋は、夜灯などを通じた地域の人との「ふれあい」がお店に来てくれることにつながっている。特に、「若い子」「小さい子」と「顔見知り」になることで、将来的なお客さんになることを想定している。この古屋の想定には、「子ども」が地域で生活を続けていくことを前提としていると解釈できる。

ただ、夜灯のような将来的なお客さんのための活動は、商店街にとってあくまでも「遠回り」であると古屋は認識しており、夜灯と商店街の一定の距離感を垣間見たともある。3.3.の夜灯の概要説明で触れたが、夜灯運営は「団体の利益だのエゴだの、そういうのを一切排除して」運営していくことを理念として掲げている。中立的な運営を掲げている夜灯実行委員会にとって、稲毛商店街振興組合は他団体と同じく相対的な関係なものとし

て考えられているようだ。

(5)地域と「子ども」

夜灯の中立的な運営を目指す意識は、以下に挙げる渡部の語りに読み取ることができる。

(夜灯の意義についての話の中で)

渡部：だから大人のメンツで祭やるなんていうのは、持論なんだけど、子どもたちのためにやるんだったら、大人のメンツはどうでもいい。ケンカするなと。大人がどうのこうの言ったって意味ないんです。

(2012.6.18 インタビュー)

ここで語られている「大人のメンツ」とは、大人の事情、具体的には大人それぞれの所属や立場を前提としたやり取りを指している。誰その顔を立てる、主催はどの団体の名義かなど、大人の事情は「どうでもいい」のであって、その理由は「子どもたち」の存在にあることを語っている。このことより、夜灯の中立的な運営は「子ども」の存在を想定することで支えられている側面があると解釈できる。もう少し具体的に見ていく。

渡部：子どもたちがどんだけ楽しみにしてくれるかが重要です。ただ、いい加減なことにはできないけどな。子どもの前じゃ。

(2012.6.18 インタビュー)

上記の語りでは、渡部は「子ども」が「楽しみにしてくれる」祭りにしていくことを重要視しており、更には「子どもの前」では「いい加減なことにはできない」と考えていることが分かる。夜灯運営において「子ども」の存在を想定するとは、「子ども」から夜灯の取り組みを見られ、評価されていることの想定であると解釈できる。

つまり、夜灯の中立的な運営において、「子ども」は中立さを維持する規範として機能している側面があると見出せる。別の言い方をすれば、「子ども」を基盤とした規範は、地域の文化としての夜灯をまとめあげているとも言えるだろう。渡部は以下のように語る。

(子どもの祭りとしての夜灯について)

渡部：そういうのも1つの文化だよな。地域の文化だし。だから昔の良いところは残して、悪いところは変えてくってというやり方をしたいなとは思ってる。

(2012.6.18 インタビュー)

5.3. 夜灯における「子ども」をめぐる語りの小括

以上、夜灯の運営に携わる中心スタッフにとって地域の「子ども」は、地域に「守られる」・地域を「誇り」に思う・夜灯という地域の祭りを「担う」存在として考えていることが語りとして表れていた。そうした考えに至る「子ども」は長期的な移行過程に沿って考えられており、夜灯が「子ども」変容の節目として想定されているようだ。ここでの「子ども」は地域の中にとどまって生活し続けていく存在として想定されているとも見出せる。

ただ、夜灯運営から少し視野を広げれば、夜灯の中立的な運営において、「子ども」は中立さを維持する規範として機能している側面がある。「子ども」を基盤とした規範によって地域の文化である夜灯が秩序立てられているとも考えられるのだ。

6. 考察と分析

6.1. 考察

夜灯に子どもが参加している機会は「ワークショップ」と夜灯当日の2つが主なものとして挙げられると前に述べた。「ワークショップ」があることで夜灯当日に子ども自身の描いた灯籠を見に行く流れがある。夜灯に子どもが参加する機会は、学校の存在を基盤としたものであり、そのおかげで稲毛地域に住む子どもの大半が夜灯に関わる仕組みが成立している。

その一方、夜灯運営の中心スタッフにとって稲毛地域の「子ども」は、夜灯に参加した経験が「地域で子どもを守ること」や地域への「誇り」などの形で語られるものへ水路づけされている認識の中で表れていた。こうした語りには稲毛地域にとどまる「子ども」の存在が前提となっていることが表れている。この前提には、やがては夜灯の運営を地域の「子ども」が担っていく／担って欲しいという想定や願いが込められている。しかし、夜灯の運営に「ワークショップ」を経験した「子ども」はなかなか現れない。

祭りの運営者たちが「子ども」について語り、さらには何か(祭、海の記憶、地域の誇りなど)を受け継ぐ対象として「子ども」を見ていることは、運営者たちが「子ども」に対して教育的意図を持っていると解釈できる。これは、教育空間として自明視されていない場(地域)において観察される教育観として見出せる。

だが、学校の存在を基盤として夜灯に参加する子どもと、何かを受け継ぐ再生産機能を希求される「子ども」とが一致しているわけではない。学校の存在を基盤とした子どもの参加は、学校という限られた空間・時間での出来事に対するものである。一方の再生産機能を希求される「子ども」の参加は、学校よりも広域な地域を舞台にした長期的な移行過程に対するものである。

学校の存在を基盤として夜灯に参加する子どもと、夜灯運営の中心スタッフが想定する「子ども」にはズレが生じていることが見出せる。何かが継承されると想定され望まれているのみで、実存としての子どもには教育的意図がどこまで伝わっているのかは分からない。語られる「子ども」の「虚構」(元森 2009) や、「子どものため」という論理が「子ども不在」(高久 2014) であるという指摘の通りとも捉えられる。教育的意図に沿った子どもの参加の動きがないのは、夜灯がある種の「通過儀礼」として機能していないからではないだろうか。

6.2. 分析

何かを受け継ぐ再生産機能を希求される「子ども」について、ターナーの「コムニタス」をめぐる議論で読み解いてみたい。ターナーは通過儀礼の「分離」→「移行」→「再統合」という過程において、「移行」の部分に注目した。「移行」という未組織で未分化な時期を「コムニタス」と呼び、無所属状態(=「リミナリティ」)だとした。つまり、通過儀礼を「所属組織からの分離」→「コムニタス」→「何らかの組織に再統合」という流れとして解釈したのである。その上で、ターナーは「コムニタス」を以下の3つに分類した。

- ①「実存的コムニタス」:
構造化されていない自由な共同体
- ②「規範的コムニタス」:
①の派生。同胞精神や仲間意識といった非功利的経験による共同体
- ③「イデオロギー的コムニタス」:
①に条件を提示する。
存在しない理想としての共同体

この「コムニタス」の図式に基づいて、夜灯と「子ども」の関係を表現すると以下ようになる。

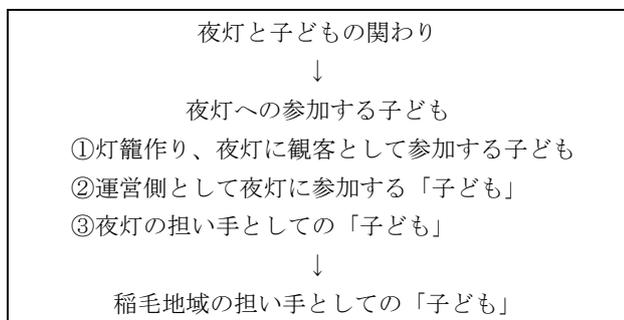


図6 夜灯と「子ども」の関係図式

この図式化から見て取れるように、途中までは実際の子どもが夜灯に参加しているが、夜灯の運営に関わる内容から語りや想定の中で表れるシンボルとしての「子

ども」によって構成されていることが明確になった。

6.3. 教育的意図の「意図せざる機能」

筆者は、この分析を通して、夜灯などの地域活動の意味のなさを主張したいのではない。確かに、「子ども」に対する教育的意図は、実際の子どもの対するものではないので空虚な側面がある。しかし、図6のような一連の関係図式を構想していることは、地域の祭りを継続していく上で強い動機づけとなっていると考えられる。

「子ども」を掲げることで「大人のメンツ」が無効化される「子ども」の中立的な側面、地域の祭りが「子ども」を意識することで規範をもつ側面は地域の文化を秩序立てている。ここに、「子ども」に対する教育的意図の「意図せざる機能」を見て取れるのであり、視野を広げれば、「地域の再生産システム」の想定として解釈することも出来るだろう。

7. 結論と課題

「開かれた学校」という観点で言えば、夜灯の「ワークショップ」は高く評価できる。地域活動の仕組みの一部として位置づく「ワークショップ」は、学校を基盤とし成立しているために稲毛地域に住む大半の子どもが何度も経験する。この事実は、「地域の再生産システム」を単なる想定では終わらせず、実際に機能していく(つまりは地域活動が子どもによって担われていく)契機になっている。筆者自身、毎年、「ワークショップ」のスタッフとして参加していると、昔は稲毛地域が海に面していたこと、夜灯漁が行われていたこと等を覚えている子どもは多いことを実感している。

また、硬直な関係性に陥って物事が停滞しがちな「大人のメンツ」などを無効化する「子ども」の機能は、地域社会の維持機能としての可能性を見出せた。

しかし、地域における「子ども」への想定や期待は地域活動の運営継続として表出的に機能している(運営側のモチベーションが高まる)のであって、道具的に機能している(地域活動の運営側として参加していく)わけではない。「子ども」を掲げれば地域活動が継続していくのは、「子ども」は象徴で済んでしまうことでもある。

子どもが参加しなくても成立してしまっている地域活動の現状と、その一方で地域活動の担い手が続かないという将来的な不安がつきまとう。こうした地域活動に子どもを参加するように仕立てると、「とりあえず参加」による「観察なき経験主義」になりかねないのではないだろうか。別の言い方をすれば、地域活動は「学びの機会」としての提示が困難とも言えるだろう。この困難を乗り越えるためには、先の表出的機能と道具的機能とをどのように接続していくか考える必要がある。

子どもと地域の関わりについて稲毛地域から示唆されることは、①地域文化を知る機会、②地域での生活を選択肢化する機会⁸の2つの機会ではないかと考えられる。①は「ワークショップ」を参照してみれば、夜灯の取り組みでもある程度達成されていると言ってよい。その一方、②は「ワークショップ」を経験した子どもが誰も夜灯運営には参加していない現状からすると、②をいかに達成へ近づけていくのが現状の限界、今後の課題と考えられる。その現状は、大人が思い描く「子ども」が支えているとするならば、地域活動の運営側である人々（大人）が変容を迫られているとも考えられる⁹。

賞賛でも否定でもなく地域での実践を観察すること、観察を通して地域活動における「参画のはしご」（R. ハート）¹⁰の段階を可視化すること、可視化された段階から「教育の機会」としての妥当性を考察していくことが研究と実践を接続し、地域社会維持に貢献するのではないだろうか。

¹ 本稿は、日本教育社会学会の第65回大会(埼玉大学)、第66回大会(愛媛大学・松山大学)での学会発表を元に大幅に再構成している。

² 田中の都市祭礼研究のまとめによれば、宗教学者の藺田稔による1972年の祭礼研究でコムニタスについての言及があり、田中自身も都市祝祭にコムニタスとしての要素を見出している(田中2007:p.74, p.80)。他にも、若林幹夫は郊外論の文脈で1970年代から盛んに行われ始めた市民祭に対してコムニタスの概念を用いて分析している(若林2007:pp.133-156)。

³ 本稿では、全員のインタビューに触れるわけではないが、インタビューから把握された知見は反映されているため提示した。フェイスシートは以下の通り。

○組合所属の5人

川口:50歳、稲毛地域出身、夜灯事務局

黒田:56歳、稲毛地域出身、夜灯福実行委員長

鹿島:40歳、稲毛地域出身、夜灯記録

古屋:54歳、20歳の時に仕事で入居、夜灯会計

渡部:60歳、2004年に隣町から入居、夜灯実行委員長

○「通い」のスタッフと大学生

大川:63歳、JR稲毛駅から4駅先に住む、夜灯ボランティア

Pさん:23歳、隣町の大学学生、夜灯ボランティア

Qさん:23歳、隣町の大学学生、夜灯ボランティア

Rさん:24歳、隣町の大学学生、夜灯ボランティア

Sさん:24歳、隣町の大学学生、夜灯ボランティア

(※10人とも仮名を条件にインタビューしている)

(※年齢は2012年当時のもの)

⁴ 「稲毛地域」は、人によって語られる範囲に差があるものの、「稲」の字がつく町名(稲丘町・稲毛1丁目~3丁目・稲毛台町・稲毛町4丁目~5丁目・稲毛東1丁目~6丁目)の範囲と考えてさしつかえない。例えば、JR線を境に北側隣接地域は「稲毛」ではなく「小中台」という認識であること等が会議の会話で確認されたりしている。

⁵ 灯籠を作る手順:A3サイズほどの用紙に絵を描いた後、ラミネート加工(薄いプラスチックで用紙を挟んで外枠を熱で溶かしてつける加工)を施して防水にする。それを筒状に丸めて重ねた端をホッチキス止めする。この筒を砂地・アロマ用キャンドルの入ったプラスチックのカップにかぶせることで灯籠が完成する。子どもが行うのは最初の絵を描く作業のみである。

⁶ 授業時間を使うこともあり当初は学校側も慎重だったようである。また、地域組織どうしのコンフリクトがあったこと、それを考慮しない学生団体、それぞれの間で関係を調整する商

店街主たちの奔走も、学校側の印象に影響があったようである。⁷ 現在の夜灯実行委員長と前実行委員長は、夜灯スタッフの代表的な存在であり、夜灯運営の方向性は彼らの発言に表れている。また、中心スタッフは住居など生活空間が近く、日々の活動を共にしており、コミュニケーションが親密である。

⁸ 地域で生活していくことを選択している若者の研究として、新谷(2007)による「地元つながり文化」が挙げられるが、これは若者独自の文化によるまとまりで、異なる世代の地域住民との接点は描かれていない。この場合、地域で生活することになっても祭りのような地域活動の担い手になるかは疑問である。

地域で生活していくことを選択する困難や葛藤については、窪田(2013)による北海道の夕張における調査があり、子ども・若者側の地域への興味が無いとは一概に言えないと分かる。

⁹ 新谷(2002)は、子ども・若者の「やりたいこと」ベースの参画を打ち立てることを提唱している。大人との対立・葛藤が生まれるような参画が「実質的な」参画であり、大人社会と子どもを連続的だとみなさず、いったんは子ども世界の独自性を認めた上で、大人社会との間をつなごうとする考え方に基づくとしている。地域活動の運営側の人々(大人)がこうした認識に変容することが求められていると言うこともできる。しかし、認識変容の困難等を考えれば、子ども・若者の「やりたいこと」ベースの参画を接続して「実質的な」参画を展開することの方が妥当とも言える。具体的には祭りの中心スタッフと大学生とのやり取りに「実質的な」参画の端緒を見て取れるが、別稿にゆずりたい。

¹⁰ 「参画のはしご」はロジャー・ハートが提唱した、子どもが活動に参画する上での8段階を述べたもの。

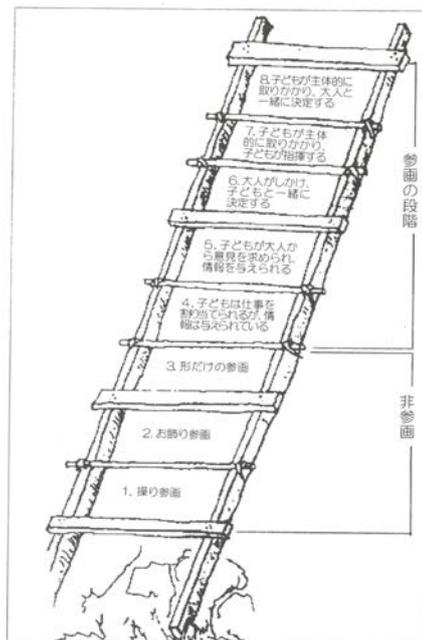


図7 参画のはしご (Hart 1997=2000 : p.42)

1段目：操りの参画（欺きの参画）、2段目：お飾りの参画、3段目：形だけの参画、4段目：子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられる（社会的動員）、5段目：子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる、6段目：大人がしかけ、子どもと一緒に決定する、7段目：子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する、8段目：子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する」と名づけられている。ハートは、子どもの参画を考える上で、1~3段目（非参画の状態）を避けることが大事だと提唱している。なお、4~8段目（参画の段階）は、上段ほど良いというわけではなく、子どもがどの段階を選んでも活動できるような状況づくりがファシリテーターに求められることを意味している。

参考文献

- 新谷周平(2002)「参加・参画論の展開と理論的課題—子ども・若者・大人の関係性から—」子どもの参画情報センター編『子ども・若者の参画—R.ハートの問題提起に就いて』萌文社
- 新谷周平(2007)「ストリートダンスと地元つながり 若者はなぜストリートにいるのか」本田由紀編『若者の労働と生活 世界—彼らはどんな現実を生活しているか』大月書店
- 伊藤雅一(2013)『祭の継続はどのようにして成り立っているか—地域の祭における教育的意図の様相』日本教育社会学会第65回大会要旨録：pp.340-341
- 伊藤雅一(2014)『象徴的に語られる「子ども」の機能—2つの地域の祭をめぐる語りを例に—』日本教育社会学会第66回大会発表要旨集録：pp.382-383
- 唐木清志(2008)『子どもの社会参加と社会科教育—日本型サービス・ラーニングの構想—』
- 窪田玲奈(2013)「地方都市における高校生の将来展望と地元志向—夕張高校3年生への調査を基に—」『教育学の研究と実践』第8号,北海道教育学会,pp.21-30
- 元森絵里子(2009)『「子ども」語りの社会学—近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房.
- Hart, Roger A., 1997, CHILDREN'S PARTICIPATION: The Theory and Practice of Involving Young Citizens in Community Development and Environmental Care: New York, UNICEF.(=木下勇・田中治彦・南博文監修 2000『子どもの参画』萌文社)
- 佐藤一子(2002)『子どもが育つ地域社会—学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会.
- 住田正樹(2001)『地域社会と教育—子どもの発達と地域社会』九州大学出版会.
- 高田一宏(2008)「「地域と社会」研究の現状と課題」高田一宏編『コミュニティ教育学への招待』解放出版社
- 高久聡司(2014)『子どものいない校庭—都市戦略にゆらぐ学校空間』勁草書房.
- 玉井康之(1996)『北海道の学校と地域社会—農村小規模校の学校開放と地域教育構造—』東洋館出版社
- 田中重好(2007)『共同性の地域社会学』ハーベスト社
- Turner, Victor Witter, 1969, The Ritual Process: Structure and Anti-Structure : Chicago, Aldine Pub. Co.(=富倉光雄訳 1976『儀礼の過程』思索社)
- 若林幹夫(2007)『郊外の社会学』筑摩書房

Google Map API V3 版

<http://www.nanchatte.com/map/circleService.html>

yahoo!地図

<http://maps.loco.yahoo.co.jp/>

千葉市 平成 22 年国勢調査報告書「結果の概要」

<http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/tokei/download/22kokutyo.pdf>

(* URL は全て 2015 年 2 月 7 日確認)